

1 インド系文字のはじまり

町田和彦

まちだ かずひこ / AA 研

南アジアから東南アジアにひろがり
百花繚乱するインド系文字。
すべてのインド系文字は唯一の源、
ブラーフミー文字にさかのぼる。
この文字はどこからきたのか？

インド系文字のひろがり

21世紀の現在、地球上で話されている言語の数は5千とも6千ともいわれる。一方使用されている文字の種類は、数え方にもよるが、40から50ほどと推定される。これは、多くの言語の表記に共通して使用されているラテン文字（ローマ字）やアラビア文字もそれぞれ1つと数えての話。この中で、数の上で約3分の2を占めるのが、いわゆるインド系文字と呼ばれる文字たちである。

インド系文字とは、前3世紀中頃のアショーカ王碑文【図1】に刻まれたブラーフミー文字に系統的に遡ることができる文字の総称である。今日、主に南アジアから東南アジアにかけて広大な地域に分布するさまざまな系統の言語を表記するために使用されている。インド系文字のひとつひとつは、それぞれ千万単位の人々によって使われていることも珍しくない。中には、デーヴァナーガリー文字（約6億人）やベンガル文字（約2億人）など億単位の人々に使われている文字もある。インド系文字文化圏というものを想定すると、およそ14億人がこの文字文化圏で暮らしていることになる。

インド系文字の不思議の一つは、約2千年の間にたった一つの源からこれほど多種多様な文字に分化していったこと、そしてその多

くが衰退することなく今日に至っていることである。この特異性は、同じように古い歴史をもち外の世界に伝播したラテン文字、アラビア文字、漢字が当初の形を現在までほとんど変えずに保持していることと比べると際立つ。たとえば、約2千年前の古代ローマ帝国時代のラテン文字（当時は大文字のみ）や後漢時代の漢字（隸書体）は、特別な知識がなくても、私たちはほとんど判読することができるのだから。

ブラーフミー文字の謎

インド系文字のもう一つの不思議は、そしておそらく最大の謎は、すべてのインド系文字の祖であり源でもあるブラーフミー文字の起源にまつわるものである。

中国最初の統一王朝である秦の成立より数十年前、南アジアにおいても最初の統一帝国が打ち立てられた。前3世紀の前半のことである。帝国の拡大にともなう血なまぐさい戦いのあと仏教に帰依したと伝えられるマウリヤ朝第3代のアショーカ王（在位前273年頃～前232年頃）は、広大な版図の各地に、施政方針あるいは統治理想ともいべき内容の詔勅を磨崖や石柱に刻ませた。現在40以上発見されているアショーカ王碑文は、西北インドの2つの磨崖碑文がカローシュティー文字で刻まれているのを除くと、ほとんど均質同一の文字が刻まれている。この文字がブラーフミー文字である。この名称は、はるか後世、19世紀のヨーロッパの研究者が仏教經典に挙げられている伝説的な文字の名前にちなんでつけたもので、特に根拠のあるものではない。なお、西北インドや中央アジアで一時期有力だったカローシュティー文字は3世紀頃には衰退し、その後姿を完全に消す。

およそ4千年前のインダス文字（未解読）からブラーフミー文字の登場までの1千年以上の間、南アジアにおける文字に関する歴史は空白である。このためブラーフミー文字の起源については、さまざまな説が提出された。インダス文字に源流を求める説、インドで独自に考案されたという説、ギリシア文字から作られたという説、遠くエチオピアのアムハラ文字との類縁性を求める説等々。最も有力視されているのは、古代北西セム系文字のフェニキア文字【解説】の流れをくむアラム文字



図1 ギルナルの磨崖碑文の冒頭部。「この法勅は神々に愛でられし慈愛の相をそなえた王（=天愛喜見王、アショーカ王）によって銘刻せしめられた」で始まる。出典：G. Bühler, "Asoka's Rock Edicts According to the Girnar, Shāhbāzgarhi, Kālsī and Mansehra Versions", *Epigraphia Indica*, Vol. 2, pp.447-465 (1894).

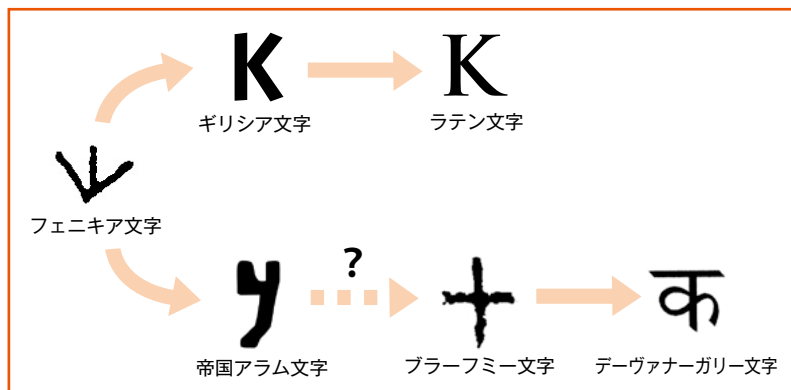


図2 KあるいはKAをあらわす文字の変遷

【解説】 **フェニキア文字** 古代の地中海世界東岸（現在のシリア付近）を拠点としていた海洋商業民族フェニキア人が使用していた文字。子音のみをあらわす文字が右から左に向かって書かれる。前9世紀頃、古代ギリシア人はフェニキア文字をもとにギリシア文字を作り出す。その際、ギリシア語には不要な子音字を、母音を表す文字として使うことで表音文字（単音文字）を完成させ、後のヨーロッパ諸文字の源となる。また、フェニキア文字は、北西セム語派に属するアラム語を表記するアラム文字に継承され、アラビア文字を含む多くの派生文字を生み出す。

転写記号	ka	ki	ku	ke	ko
ブラーフミー文字	𑍇	𑍆	𑍅	𑍄	𑍃
デーヴァナーガリー文字	क	कि	कु	के	को
ベンガル文字	ক	কি	কু	কে	কো

図3 「カ」と「クケコ」

との関係である。

アラム文字はアケメネス朝ペルシア帝国（前550～前330年）の公用文字として非常に広く用いられており、マウリヤ朝時代またその以前の東西交渉史からみても、インド人がアラム文字の知識をもっていたことは十分推測できる。確かにブラーフミー文字には、アラム文字の字形とそのあわす音に対応すると考えられる例【図2】がいくつもある。それらの字形の多くは、古代文字の伝播の過程でよくみられるように、文字の上下や左右を逆にした上での類似である。一方ブラーフミー文字には、アラム文字にはないインドの言語特有の音をあらわす独自の文字のほかに、当時の標準的なアラム文字では説明できない字形も多く含まれていることも確かである。このことからブラーフミー文字はまだ知られていないアラム文字の変種から派生した可能性がある」と論じる学者もいる。もしこの仮説が正しく、両者を結ぶミッシング・リンクが明らかにされれば、漢字を除く世界の文字の大半がフェニキア文字の子孫ということになる。

音節文字ブラーフミー文字

ブラーフミー文字は、仮にアラム文字の流れをくむとしても、最初から全く性質の違う文

字として出発する。アラム文字は、基本的に子音のみをあらわし母音はあらわさない。たとえば英語のpat, pit, put, pet, pot を区別することなく単にptとあらわす要領である。一方、ブラーフミー文字は母音を常に明示的にあらわす音節文字である。まず子音字そのものが、最初から母音aを含んだ音節文字である。ちょうど仮名文字の「カ」(ka)と同じで、子音kと母音aに分割できない。a以外の母音を含む音節は、子音字の上下左右に一定の母音記号を付けて「キ」「ク」「ケ」「コ」をあらわす【図3】。母音記号が付くと、子音字は純粹に子音のみをあらわす。この表記法はとて経済的で、仮名文字のようにすべての音節に固有の文字を割り当てる必要がない。たとえば10個の子音字と4個の母音記号（母音記号がないことも含めれば5個）で、計50個の音節をあらわせる。

単独の子音字に母音aが含まれているという点について、単音文字であるギリシア文字やラテン文字からみれば、文字の発展プロセス

において進化が不徹底であるという考え方がある。しかしアショーカ王碑文の言語を統計的に解析すると、母音がaで終わる音節、つまり単独の子音字だけであらわせる音節の頻度が、すべての音節の中で最も多く40%を超すことがわかっている。このため、多くは子音字だけで用が足り、母音記号を付けたとたんに純粹の子音文字として機能するブラーフミー文字は単音文字よりも効率的であるともいえる。

後世、ブラーフミー文字から派生した各種インド系文字が、時代も場所も異なるさまざまな言語を表記することになったとき、この子音字にアプリオリに含まれている母音aをどのように消すか、つまり子音だけをあらわしたい場合どうするかという問題に直面することになる。こうした不具合は、特定の言語と特定の文字の、最初期の「幸福な結婚」が過ぎ去った後、どの文字も抱えることになる宿命である。少なくとも、ブラーフミー文字はアショーカ王碑文の言語を記すには、必要にして十分な文字だったと言える。

仏教遺跡で知られるミャンマーの古都バガンの名物喫茶店ミョーミョーの看板（ビルマ語、ビルマ文字）。左上にはミャンマー・ビールの広告も見える。



宗教的な聖域での酒類売買および飲酒を禁じたタイ語（タイ文字）の標識。左側の酒瓶とグラスの後ろに描かれているのは、仏教寺院の屋根を象徴化したものである。タイ東北部プリーラム県にて。



ニューデリーの中心地では、道路の大小に関わりなく、道路標識を目にする。道路名は、デーヴァナーガリー文字（ヒンディー語）、ラテン文字（英語）、グルムキー文字（ハンジャービー語）、アラビア文字（ウルドゥー語）の4つの文字で書かれている。